



sousei akita

曹青秋田

秋田名「佛」 ～4教区・珠林寺(鮎川義寛副会長師寮寺)の佛様～



一年を振り返って

秋田県曹洞宗青年会会長

栗谷 大三



昨年四月の総会で会長を拝命し、早いもので一年が過ぎようとしております。私に務まるのだからかと当初は不安な気持ちでございましたが、周りの方々に支えられ、何とかここまでやってこられました。

今期も、コロナウイルスの感染状況を見ながらの活動となりました。それでも、六月の弁道会では、東北管区教化センター布教師の長岡俊成師をお迎えし「共に考えよう『SDGs×寺院の可能性』」と題しご講演いただき、十月

の祈りのつどいを併催した随聞会では、被災地へ祈りを届ける法要を行うとともに、曹洞宗復興支援室分室主事の久間泰弘師をお迎えし「東日本大震災から十年を迎えて―今、伝えたいこと」と題してご講演いただきました。また三月の住職学研修では、映画「典座」の上映を行い、主演の河口智賢師から「映画『典座』を感じた現代社会における仏教の役割」と題しご講演いただきました。こうして、例年と等しく研修が出来ましたことは、会員皆さまのご理解とご協力、ご参加があったおかげだと思っております。ありがとうございました。

開催するにあたり、判断が難しい場面も何度もありました。その都度話し合い、考え、判断して参りました。また集まる事が出来ないからこそ、実際に顔を合わせ、声を聞き、その場の雰囲気を感じることも大切さも実感いたしました。このコロナ禍での経験を、次の一年にも活かし、出来ることを出来る限り行って参りたいと思えます。

会員の皆さま、県内御寺院さまには、引き続きご指導ご協力を賜りますよう、伏してお願ひ申し上げます。



祈りの集い

随聞会

併催

さる十月二十三日、秋田キャッスルホテルにて、「祈りの集い」と《随聞会》が併催された。今回は東日本大震災から十年の節目を迎え、「被災地から祈りを込めて」と銘打たれた。まずは《祈りの集い》で物故者を供養し、そのうえで《随聞会》で被災者に思いを寄せ、現状と課題を学ぶ――という取り組みであった。

随聞会で御講義下さったのは、福島県龍徳寺御住職・久間泰弘師である。師は震災発生当時の全曹青会長であり、津波被害に加えて深刻な原発事故に見舞われた福島県の宗侶として、復興支援に携わってこられた。ピーク時に約十六万人を数えた避難者も、九月現在で四万人を切った。福島では放射線量も事故当時の1/10以下となり、ハード面でも復興は着実に進んでいる。とはいえ、原発周辺の自治体住民は、そのほとんどが十年以上の避難生活を続けており、もはや生活基盤の全てが避難先に

移行している。国はさかんに安全性をアピールし、帰還を勧めるが、アンケートでも大多数の住民が「戻らないつもり」と回答した現状に、時間の経過の残酷さを感じた。

師は、東北福祉大で学生との交流を続けている。今回の新入生達は震災当時八歳だった。これは、環境が激変した現実を他人に伝えられる最低年齢といわれている(身近な人の死を伝えられる最低年齢は十一歳という)。震災孤児の新入生に尋ねると、「本当に大変でした」「いっぱい助けてもらいました」という言葉が最も多いそうだ。震災以後、行政の支援は迅速化し、孤児がスムーズに養護施設に入れるようになった。ただ、東北では両親を失った孤児を、親戚や友人が引き取って養育したケースが非常に多いという。これは他の地域に比べて際立った特色だそうで、人間関係が濃密な東北の特性といえよう。

また、震災関連自死者数の統計を年度・性別・年齢で比較すると、震災に限らず紛争や事故の影響は女性や子供に強く現れ、それによつて大きく変わった日常が続くと、そのストレスは男性に強く負荷をかけるという。動機は「健康問題」が圧倒的だが、それには鬱病な

ど精神的なものも当然含まれる。この度の「コロナ禍」でも女性や子供の自死が激増した。終りの見えない苦しい日常が、精神を蝕んでいくのだと感じた。

日本は災害大国であり、近年はその頻度が増えている。一つとして同じ災害は存在せず、季節・種類・範囲もさまざま。これからのボランティアは特に、「被災者中心」「地元主体」「協働」の三原則が大前提となる。また、発災→緊急支援期→復旧期→生活支援期→復興期→日常というサイクルに依りて、関わり方を柔軟に変えなくてはならない。そして被災者を傷つけない配慮、他者を認め受け入れる姿勢が欠かせない。特に原発事故やコロナ禍では、過剰で偏った報道の結果、《分断・排除・差別》が横行した。まずは情報を鵜呑みせず、自分の頭で冷静に精査していく事だと思ふ。

未曾有の災害からの復旧・復興に取り組み続ける師の御講義は、一つ一つが重かった。時々言葉に詰まる場面があったが、真摯に伝えようとする姿勢が伝わってきた。貴重な機会を頂いた事に感謝し、身近に災害が起こった際の準備と心構えを持つ決意を新たにした。(佐々木耕志)



ZENSOUSEI
ONLINE
FESTA

栗谷大三師と
深川尚隆師の
対談を拝見して

この度、栗谷大三会長と龍仙寺
ご住職深川尚隆師とのオンライン
対談を拝見させて頂いた。国外の
曹洞宗寺院を知るのは、私たち若
輩の僧侶には貴重な見地である。
私にとっては、かつて師匠が永平
寺安居中にハワイ行きを監院寮か
ら打診されたが、当時の住職であ
る私の祖父から許可されなかった
という。話を聞いた時には、ハワイ
にも寺院があるのかという程度の
認識だったが、こうして現地の活
動を聞き、改めて一つの法縁であ
ると感じる事が出来た。

「飛び地文化」という言葉があ
る。日本では失われつつあり、惜し
まれている文化が、ハワイでは寺
院を中心に現在進行形である光景
に、有り難さや日本人ならではの
ノスタルジーを感じた。が、強く考
えたのは、「メンバー」という信徒
の呼び方、盆踊りが盆ダンス、甲い
供養がセレブレイト、枕経がベツ
ドサイドサービスと称されること
等々、呼び方は土地や国柄に合わ
せつつも、本質は貫かれているこ
との重要さだった。

我々が普段から当たり前のよう
に使っている用語が、一度解体さ
れて再構築された時に、改めて本
来大切だった意味合いがよみが
えってくる。それは向こうの人々
にとってみれば当たり前の言葉や
光景であるが、内に「日本・我々の
仏教」というものを持ってしまっ
ている我々には、とても大きな視
点だと思う。そしてそれが、ハワイ
で活動する僧侶に与えている影響
というのものも強く感じさせた。

深川師の持つ空気と、「形にこだわ
らず、一番大事な部分を重視する
ことが大切」という言葉がまさに
それで、師がメンバーと相互に感
じながら、共に積み重ねている

様々な物事を語る素晴らしいものだと思え
る。
より様々な土地土地の寺院僧侶のありよ
う、各宗教のありよう、そこへ目を向けるべ
きだと思わせて頂ける対談であったと思う。
栗谷大三師と深川尚隆師、両師の見識に敬意
を表し、対談の感想とさせて頂きたい。

(土屋 泰順)



「住職学研修」に参加して

三月二日、秋田県宗務所・禅センターにおいて令和三年度住職学研修「映画『典座』を感じた現代社会における仏教の役割」が開催されました。

講師として映画『典座』の主演も務められた河口智賢師を迎え、最初に映画を上映し、この映画を作った智賢師が感じた事を話して頂きました。

この映画は僧侶たちの日常をフイクションを交えたドキュメンタリー風に描いており、山梨県の師寮寺にて全国曹洞宗青年会副会長を務め、いのちの電話相談、精進料理教室やヨガ坐禅などの活動をしている智賢師と、東日本大震災によってお寺や家族が津波に流されてしまい、瓦礫撤去の作業員として仮設住宅に住みながら本堂再建を諦めきれずにいる倉島隆行氏の、境遇は違いなながらも「今仏教は求められているのか？今こそ本当に信仰が求められる時代ではないのか。」と苦悩しながらも、仏道に

生きる青年僧を映した作品でした。また作品の要所では智賢師と青山俊董老師の禅問答があり、智賢師の悩みに対してとても丁寧な答えられていました。私はこの映画を初めて観させていただきました

が、家族にアレルギーを持っていない方や、未だ復興が完了していない地域の方、実際にはもっと多くの悩みや心配事を抱えている方が、まだまだたくさんいるということを改めて思い知らされました。また、今まで研修会などで僧侶としての悩みや相談を聞くという事はあっても、それを一般檀信徒に公開するということが少なかった為、このように映画を観てもらって、僧侶だって同じく悩んでいるんだと、よりわかってもらえるようになるのではないかと感じました。

智賢師は上映後、実際に自身が開催している子ども食堂の活動を話してくださいました。現在は子供たちに食事を提供するだけでは

なく、都留文科大学の学生ボランティアと地域の子供たちの交流の場でもあり、さらには子供の親御さんや、地域のお年寄りも集まる場になっているそうですが、継続するためには力を入れすぎないことが大事だとおっしゃっていました。「自分で何かを始めようとすると人が集まってくるから、何でも一人でやる必要はない」という言葉は、まさに今の時代に伝えていきたいと感じました。(佐々木光惇)



もう一人の祖師

白洲正子『明恵上人』

(講談社文芸文庫)



この方をどうお呼びするべきか。宗派で分けてしまえば華嚴宗侶となるのだろうが、決してそんな名前に縛られない生き方をした一人の僧侶がいる。希代の荒法師・文覚を師にもちながら、深山

親鸞上人と時を同じくして生まれ、道元禪師と同じ時代を生きた。鎌倉仏教興隆のまっただ中にありながら一宗を興すこともなく、釈尊という一人の人間を愛し、その教えをひたすらに守ろう

幽谷の中でただひたすら純粹に自身と向き合い、釈迦の教えを求めたその人を、作中で著者は「美しき仏教徒」と呼んでいる。まさにこの明恵上人はその本んな人で、この本に出会って私の進む道が決まった思いがした。この意味で、この方とは間違いなく私にとってもう一人の祖師である。

とした生き方は、実は道元禪師と感応するところがあると思う。事実、住持していた梶尾山高山寺には、本人が書いた清規に近いものが残されており、その中には東司の使い方や食事の仕方、掃除の仕方までが事細かに記されている。が、それは禪でもなく密教でもなく、ましてや浄土教でもなかった。ただ、「釈迦という美しい人を信ずる者」として、自身はどうあるべきかということに貫き通し貫こうとした姿が、この本では実に素直に語られている。

三月十五日、釈迦牟尼世尊涅槃会が執り行われるが、現在日本で行われている「涅槃講式」の基礎を作ったのは、この明恵上人である。講式の最中、あまりの悲しさに涙を抑えられなくなり、弟子に読経を任せたと逸話は、明恵上人がどんな方であるかを如実に語るものだろう。

「あかあかや あかあかあかやあかあかや あかあかあかやあかあかやあかあかや月」

西行法師に教えをうけ、月の歌人と称された明恵上人の作である。日本人初のノーベル文学賞作家である川端康成は、「美しい日本私」と題した受賞記念講演の中で、日本を代表する歌として

これを筆頭に上人の歌を多数取り上げており、奇しくもそれに並んで紹介されているのが、道元禪師の「春は花：」であった。日本仏教徒、いや日本人に確かに息づく数寄やあわれといったものの中には、間違いなくこの明恵上人の存在がある。

美しき仏教徒と、美しき文人である両者の感応が生んだ名著であるこの「明恵上人」。宗派を越え時代を越え、語り継ぐべき「仏弟子の姿」がここに記されている。(土屋 泰順)

追記

茶文化を日本に伝えたのは栄西禪師であるが、その栄西禪師から茶を譲り受け、茶畑を作った「茶の祖」はこの明恵上人であり、未だに宇治では新茶を明恵上人へ捧げるのが伝統となっている。かつて栄西禪師は、自身の後嗣となることを明恵上人に願ったことがあった。それを本人は固く辞したというが、両者の交流はその後も続いたと言われている。

書 評

石川力山・編著

『禅宗小辞典』
(法藏館)

本書は、佛教書籍出版社の老舗・法藏館が刊行した「佛教小辞典シリーズ」の一つで、各宗派の基本的用語・約五百項目を網羅したものである。中でも本書を編んだのは、駒澤大学佛教学部教授を務めた石川力山（一九四三～一九九七）である。曹洞宗教団史、

特に相伝資料《切紙》研究の先駆者として偉大な足跡を残した。以下、中尾良信の手になる本書の序文を抜粋したい。

本事典は、著者・石川力山氏が、ほぼすべての原稿を書き下ろしながら、平成九年八月四日に急逝されたため、私が一部分

加筆訂正して、今日出版の実現をみたものである。石川氏の後輩として、出版のお手伝いができたことは多大なる喜びである（中略）特に「禅宗の歴史」は、氏の研究活動を通じて打ち立てられた禅宗史論として、力を込めて書かれたものである。

氏の三回忌に当たり、本事典の刊行を実現できたことで、僅かながらも学恩に報いたものと信じつつ、謹んで氏の真前に本書を捧げたい。

石川が遺した未完の原稿は、他にも学友達の手によって結実した。同じ法藏館から刊行された『禅宗相伝資料の研究』（全二巻）は、まさにこの分野の研究史における到達点といえる。後書きには石川本人による、一歳の時に戦死した父親への想いが綴られている。機会があれば是非お読み頂きたい。

さて、中尾が紹介していた部分は、石川が禅宗史を概観した『禅宗の成立と日本伝来』という文章である。ここを読むだけでも私は「目から鱗が落ちる」思いだった。やや乱暴ではあるが、印象的な部分を抜粋したい。

禅宗は：・明確な歴史的人物としての宗祖を有さない：・菩

提達磨は：・有り体にいえばインドより渡来した習禅僧達を集約した複合的人間像で：・数世紀にわたって、一人の中国的達磨像を創作し、肉付けし、歴史性を持たせ、新しい思想を語らせ、人格を付与させた：・中国禅宗の成立を、この西来祖師としての達磨像のイメージそのものが確立する時期に措定することも十分根拠がある。

常に、自らの集団化し画一化しつつある体質や思想を、内部から揺さぶり続けるエネルギー：・をこそ、「禅」というのかもしれない。

「教外別伝」という標語には、他の佛教教団では全く説かない「拈華微笑」という：・言語表現そのものを否定するニュアンスが強いが、「不立文字」にはむしろ、言語表現の無限の可能性が看取される。

文章の紹介に終始してしまつたが、本書の特徴を伝えるなら、「気が向いた時に、適当なページから開いて一つの項目を読むだけで、確実に自分の為になる」事典だと思う。会員諸兄には是非蔵書に加えて頂きたい。

(佐々木耕志)

ロシア連邦の

ウクライナ侵攻について(談話)

曹洞宗宗務庁 宗務総長

鬼生田 俊英

※公式HPより転載

ロシア連邦がウクライナに
対する「全面的な侵攻」に踏み
切りました。

軍事施設を標的とするとし
ながら、首都キエフや東部ハ
リコフなどの戦闘において、
民間人も含めた多くの人々の
命が奪われたという報道もあ
ります。

まずは、この惨禍によって
命を落とされたすべての方が
たへ、深く哀悼の誠を奉げ、大
切な家族や友人を失った方、
負傷された皆様に、衷心より
お見舞い申し上げます。

すべての生きとし生けるも
のにとつて、命は等しく尊く、
かけがえのないものでありま
す。国の威厳や国益、主義主張
など、いかなる理由によつて
も「殺してもよい命」や「殺さ
れてもかまわない命」は存在

しません。また、誰一人とし
て平穏な生活が奪われ、家や
財産を失い、居住する場所を
追われることも許容されませ
ん。

曹洞宗は「自も他も傷つけ
ない」という立場を貫き、戦争
の遂行や暴力・破壊への誘因
に結びつく思想や社会行動に
同意しないという「非戦」の立
場を堅持します。そして、過去
に体験した戦争の悲惨さを繰
り返さないための智慧と、い
のちの尊さを自覚しあう慈悲
によつて、世界平和の実現が
叶うと信じています。

その根本には、お釈迦さま
のみ教えと、道元禅師、瑩山禅
師のお示しを依りどころとし
て、争いを治めることができ
る寛容に満ちた社会を築くべ
く、まごころをもって努力す

ることをお誓いするという精
神があります。

仏教徒である私たちが、ま
ず、人々の安寧のためになす
べきことは、戦争の惨禍に巻
き込まれ、混乱に陥れられ、平
穏な生活を奪われた人びとの
あらゆる痛みと苦悩に寄り添

うことであります。さらに、一
人ひとりが当事者として考
え、行動する必要があります。

私たちは、世界中の誰しも
が安らかに生きられる世界の
実現を目指し、「竿頭の先に未
来をひらく」ための実践を、不
断に続けてまいります。

